

幼児教育の源流

○荘司雅子編

○明治図書

編者の荘司雅子先生は日本保育学会の副会長であり、フレイベル研究では、フレイベルが世界で初めて幼稚園を創ったドイツのブランケンブルク市長から「フレイベルの事業を伝達するのに功績のあった者に対する表彰状」を受けられた。日本保育学会では西洋教育史研究者としての業績も多い。この荘司先生の指導のもと、西洋教育史上、幼児教育の重要性を理論的あるいは実践的に明らかにしてきた十三人の業績をまとめたものが本書である。

とり上げられた十三人は、コメニウス、ロック、ルソー、オウエン、オベルリン、ペスタロッチ、フレイ

ベル、ディースターヴエーク、ビーボデイ、デューイ、モンテッソーリ、クルプスカヤ、マカレンコである。

それぞれの人物について、生涯と時代背景、教育論、幼児教育理論(その内容・方法と原理・特色など)、現代的意義などが明らかにされている。

これらは、正しく幼児教育の源流というにふさわしいものである。編者がまえがきで次のように述べていることは、本書が、幼児教育をよりすばらしいものとしようと意欲する人々に、そのエネルギーをパーソナリティの根源から燃やさせるものであることを明白にしている。

「教育の歴史を学ぶということは、過去を知るためではなくて、未来を作る意味をもっている。われわれは混迷をつづけている現代の幼児教育、危機に直面しているといってもいい現代の幼児教育界を克服して、幼児を幼児の世界にもどし、幼児に固有な生活と遊びと学習のできる

幼児教育を実現したいものである。そのために、私どもは過去を知らなければならぬ。幼児教育をきずいてきた人びとの心にたち返り、その真の姿をとらえなければならぬ。」

とくに、今日の幼稚園・保育所で保育にあたっているひとのなかには、日々の保育に対応する技能を身につけるだけの段階にとどまりがちのひとが少なくない。また、幼児の発達を単に統計的に処理された平均像でとらえ、これに個々の子どもを合わせようとして、保育を生彩のないものにしていくことも少なくない。

こうした危険な傾向に対し、本書は、幼児教育が、時代・社会とのかかわりをもつ歴史的な性格をもつものであること、かつそこに一貫して流れる基本原理が横たわっており、それを洞察しようとするところに、真の幼児教育者のスピリットが生まれることに対し、有意義な示唆を与えてくれる。

(岡田正章)